様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月　11 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20720191
研究課題名（和文）　「卜筮祭祷簡」による戦国楚の宗教文化の研究
研究課題名（英文）　Research of the Chu religious culture in the Warring-States period based on the Divination/Sacrifice Manuscripts
研究代表者
森　和（MORI MASASHI）
早稲田大学・高等研究所・研究員
研究者番号：10367146

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：出土文字資料

１．研究計画の概要

本研究は戦国時代の楚墓から出土する「卜筮祭祷簡」と呼ばれる竹簡資料を主たる史料として分析し、戦国楚の宗教文化を考察するものである。現在すでに図版・釈文が公表されている包山楚簡・望山楚簡・葛陵楚簡の 3 種類のうち、赤外線カメラによる撮影が行われる予定のない葛陵楚簡の撮影ができるよう、武漢大学簡帛研究センターを通じて河南省文物考古研究所との共同研究体制を確立する。撮影が実施されるまでは、資料状態が良く、最も体系的に整った内容をもつ包山楚簡の訳注をこれまでに蓄積されている先行研究の成果を集成する方向で作成し、本研究の基礎とする。また、葛陵楚簡の報告書『新蔡葛陵楚墓』所載の釈文および図版に基づき、分類および整理を進め、訳注を作成する。報告書所載の図版が不鮮明な望山楚簡については、以前参加していた研究プロジェクトでの機材で撮影される赤外線写真の図版が刊行されるのを待ち、そのデジタルデータ化と訳注作成を行う。なお、図版・釈文が公表されていない天星観楚簡および秦家嘴楚簡の「卜筮祭祷簡」については、『楚系簡帛文字編』から当該簡文を復元した先行研究に拠ってテキスト化する。このように包山・葛陵・望山を中心とする「卜筮祭祷簡」のテキストデータに基づいて構文分析や相互比較を行い、当時の巫祝（宗教的職能者）集団が戦国楚の貴族層とどのように関わり、社会の中で如何なる活動を行っていたのかを考察する。

２．研究の進捗状況

葛陵楚簡「卜筮祭祷簡」の赤外線撮影を行うための機材購入について関係諸機関との交渉・調整に膨大な時間を費やした上に、結果的に購入自体が不可能となったため、本研究の重要なポイントである葛陵楚簡の赤外線写真に基づく研究分析という計画を大きく変更せざるを得なくなった。そのため、まず各「卜筮祭祷簡」の比較分析を行う上で最も体例が整っていて「卜筮祭祷簡」研究の基準とすべき包山楚簡の訳注を発掘報告書『包山楚墓』(荊沙鉄路考古隊、文物出版社、1991 年) 所載の釈文注釈・図版に拠って作成した。

その後、以前参加していた研究プロジェクトでの機材で撮影された赤外線写真に基づく新たな釈文・注釈が『楚地出土戦国簡冊［14 種］』(陳偉等著、経済科学出版社、2009 年 9 月）として刊行されたため、報告書に基づいた包山楚簡の訳注を最新の当該書によって修訂補完した。また当該書に赤外線写真の図版そのものは収録されていないという不充

分さがあるものの、望山楚簡についてもこの新テキストに基づく訳注作成を行った。

葛陵楚簡については上述の理由により、前掲報告書所載の釈文および図版に拠ったデータ化を行い、包山楚簡の構文に基づく分類整理を行った。また釈文・図版ともに未公表の天星観楚簡および秦家嘴楚簡の「卜筮祭祷簡」については、当初の計画通り、簡文の復元を試みた晏昌貴による両種の「釈文輯校」を基にテキスト化を行った。

このような各「卜筮祭祷簡」を整理したテキストデータに基づく比較分析を行い、占いを行う貞人・占いの道具、祭祀名称の検討の他、「卜筮祭祷簡」中の「巫」に関する個別的な分析を進めた。

３．現在までの達成度

③やや遅れている。

本研究の現在までの達成度がやや遅れている最大の理由は、葛陵楚簡「卜筮祭祷簡」の赤外線撮影を行うための機材、つまり富士フィルム USA が科学・医療分野の特定用途向けに開発した赤外線撮影対応のデジタル一眼レフカメラ「IS Pro」を日本で購入するのが不可能となったため、研究の初年度から次年度にかけて膨大な時間を費やした交渉・調整が無に帰してしまったことである。

また計画申請当時、確認済みであった武漢の簡帛研究センターによる楚簡の赤外線写真に基づく再整理およびその成果『戦国楚簡合集』が、図版を収録しない釈文と注釈のみの『楚地出土戦国簡冊［14 種］』という形で刊行されたため、望山楚簡「卜筮祭祷簡」についても新しい赤外線写真のデータが得られなかった。

主にこの２つの原因によって当初の計画は変更を余儀なくされ、発掘報告書所載の旧版の図版および釈文・注釈に拠って作成した各「卜筮祭祷簡」の訳注や逐字対照表などを、赤外線写真に基づく『楚地出土戦国簡冊［14 種］』所収の新たな釈文・注釈によって改めて修正補完するという、基礎作業に多くの時間と労力を注がなければならなかった。

４．今後の研究の推進方策

新たに撮影された赤外線写真の図版が未収録とは言え、『楚地出土戦国簡冊［14 種］』に収められている包山・望山・葛陵の３種類の「卜筮祭祷簡」の釈文・注釈は現時点で最も信頼できるテキストである。従って、本研究の成果として作成している各「卜筮祭祷簡」の訳注は当該書に基づいて完成度を高めてゆく。その過程で整理されるテキストデータにより各「卜筮祭祷簡」の比較分析、個別具体的な内容の検討を通して、戦国楚における巫祝集団の在り方を浮かび上がらせ、貴族層との関係で営まれた占卜・祭祀などのシステムを再構築する。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

(1)森和「離日と反支日からみる「日書」の継承関係」（工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009 年３月、132～156 頁）、査読無。

(2)森和「「日書」と中国古代史研究—時称と時制の問題を例に—」（『史滴』第 30 号、2008 年 12 月、25～44 頁）、査読無。

(3)森和「日者の語った天地の終始」（『アジア遊学』第 115 号、勉誠出版、2008 年 10 月、126～135 頁）、査読無。

(4)森和「從離日與反支日看《日書》的繼承關係」（簡帛網、武漢大学簡帛研究中心、2008 年８月、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=867）、査読有

〔学会発表〕（計２件）

(1)森和「放馬灘秦簡乙種《日書》所見音律占浅析」（中国簡帛学国際論壇 2010、於中国・湖北省武漢大学、2010 年 12 月６日）

(2)森和「從離日与反支日看《日書》的継承関係」（出土数術文献国際学術研討会、於中国・湖北省武漢大学、2008 年４月９日）